ソシュールの言語論理解の為に：
ソシュールの言語論の各タームを纏めながら、ソシュールの言語論への視点を纏め、19 世紀末葉において、近代的自我作用への圧倒的な信頼が巻き起こる時代の中で、後に「実体概念から関係概念へ」とされる「現代思想」の始まりとしての「ソシュールの言語論」を、丸山圭三郎を通して、21 世紀の現在から読み進めてゆきたい。

（キー概念）　差異のみが、言語的意味をめぐる「メルクマール」指標・目印である。
言語は社会的産物・社会制度的に機能

ソシュールの言語論理解のために
**１．３つの概念（ラング・パロール・ランガージュ）：**
ソシュール以前は、「ラング（言語)」として一括りであった「言語使用の全体」というべき「ラング（言語)」について、ソシュールは人間の言語能力を「ランガージュ」とし、この能力が、「パロール（言語音声)」を一次産物として駆動し、その「パロール（言語音声)」の二次産物としして、言語使用の全体像をこの 3 概念によって論じている。

**1)「ランガージュ」**は、人間の象徴機能、概念化能力、そしてシンボル化能力[1]の源とされる人類普遍の言語能力として措定されている。ランガージュという潜在能力が顕在する場面は、一次的には個人的意思によるパロール（言語音声）であり、このパロールの活動から二次的に社会制度と言うべき「ラング（言語)」が、その体系性が言語集団的、社会的に生成構築されている。

**２）パロール（言語音声）**は、個人の発語行為による言語音声として措定されている。言語表象をする主体が、自身の意識により進める言語音声（パロール）の連続過程（連鎖）であり、人間の精神の機能の二つの軸（意識の上下）の同時駆動の下で、時々刻々とディスクールの実践を進める言語音声とされている。パロールは、言語表象を進めるランガージュの実践課程であり、言語使用の現場で言語音声に揺らぎを生じるなどを通して、言語の体系に共時変換、通時変化を引き起こすとされる。P188-189（読む）

**３）ラング（言語）**は、ランガージュという人類普遍の言語能力に対して、個別文化毎に体系化されているラング（母国語）であり、「個人は、話すように生まれついているが、この道具を行使できるようになるには、彼を取り巻く社会によってのみである[2]」とされる。人間の言語能力、象徴機能が働きつつの言語表象、その個々人の言語使用を規律する体系であ

[1] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P172　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日
[2] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P112　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

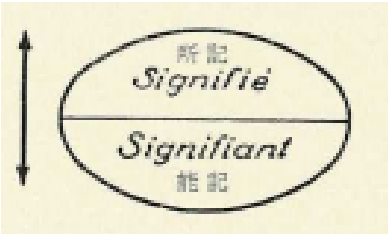
りながら「ラングが生まれるもととなる契約が成立するためには、数千の個人のバロールが必要[3]」という。ラングは個々のバロールの実践、その積み重ね、「母国語集団・社会」の言語使用により、社会的に構築生成される体系性、〈構成された構造[4]〉である。そして次に述べる意味の単位「シーニョ」を格納する体系であり、その「シーニョ」の抱え持つ記憶の「倉庫」、あるいは美しく「宝庫」と形容されている。

## 2.「シーニョ」の定義

①「シーニョ」の構成：ソシュールは、言語の意味を抱えた単位として「シーニョ」を措定する。その構成が有名なジュネーブ大学の講義の中で図解されており、「音（聴覚映像）image auditive」と「意味（概念） concept」が一体的に結びついた意味の単位である。いわば「言語音素の配列集合体」である「シーニョ」の「音の配列の差異」がもたらす「音響イメージ」、その違いにおいて、一つの概念（言語の意味）と一体的に結びついているとしてイメージされている。その「音」と「意味」の絆は全くの恣意・自由であり、この性質をソシュールは言語の「第一の恣意性」としている。

ソシュールのジュネーブ大学の第Ⅲ講義での「シーニョ」の図解を残したデガリエ（聴講生）のノートにおいては、その図の外側に付された矢印の方向が、「音」から「意味」の方へと一方向に向かう、あるいはこの矢印は書き入れられない図が多い事を指摘する研究者もおられる。しかしレヴィ＝ストロースに「ソシュールのアイデア」を伝えたヤコブソンにおいては、彼の音韻論の講義を記した「音と意味の 6 章」において、双方向を向く矢印を示している[5]（P102,103）。

「音と意味についての 6 章」P102 の「シーニョ」の図




ヤコブソンの解釈において、「シーニョ」の外側に書かれた矢印は双方向を向いており、その事は音響イメージ（Signifiant シニフィアン）と意味（Signifie シニフィエ）の間の絆は双方向をむいており、音響イメージと言語的意味は一体的、同時発生的に結びついている

---

[3] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P85　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[4] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P44　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[5] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P102，103　みすず書房 2008 年 11 月 10 日

と言う理解になろう。そして「シーニョ」の配列関係として生成されるバロール（言語音声）の連鎖は、「呼びかけ」、「ディスクール（言述）」の生成として、その言語使用の場で駆動する人間の精神活動の二つの軸、連辞と連合の軸のせめぎあいの中で進むと想定されよう。

言語の二つの性質は、線状性と恣意性であり、前者は発声運動・身体運動をコントロールする意識下で機能する連辞の軸により、後者は精神運動・類推作用に係る、意識上で機能する精神機能、連合の軸によると想定されている。「シーニョ」は、ディククールの実践を構成する基本単位、言語的意味の単位として措定されている。
※参照）この文章の後段の３．言語の線状性と恣意性　4．言語を繰る人間の意識について

「シーニョ」は発語された「音素の配列関係」の「差異」によって「音響イメージ」を醸成し、その「音響イメージ」の湧出過程については、「イメージ」という規定性からも人間の聴覚だけではなく、視覚・嗅覚等五感の動員を含んだ、ある想念性をかかえていると理解されよう。いわば象徴機能とされる精神機能をもって、人間の意識に浮かび上がる、音響イメージと一体的な言語的意味であり、言語表象する人間の指向対象が意識に届いた状態、その心的動態をもって自らの指向対象の解釈、その表象としての「シーニョ」でありつつ、「指向とはランガージュによる言語外現実の一つの解釈であり、差異化です。[6]」とされており、その「差異の感興」において、「意味」の側からも、そして「音」の側からも、「音響イメージ」として、「意味」と「音」の間の絆が、双方向的なつながりもっているところの言語の意味の単位が「シーニョ」として措定されていると考えられよう。その「シーニョ」の意味の範囲は、他の近接する意味を抱えた「シーニョ」との差異関係において配分される、それら「シーニョ」の格納形式、体系性が、ラング（言語）の体系と理解されよう。

※**象徴機能**：今、そこにない物を呼び起こす働きをするという機能である。つまり、意味するものと意味されるものとを区別して使うことが可能になるということ、今そこに知覚しているものをてがかりにして、そこにないものを思い浮かべ、それに反応することが可能になるということなのである。(happycampus.co.jp)

目の前にないものを別のもの（言葉、記号など）を使って、表現する機能のこと。象徴機能（シンボル機能）によって、心の中で刺激を保持すること（間接化）が可能となる。
https://it-counselor.net/psychology-terms/representation-symbol
（眼前の事実、実体を越えて、それは時空を超えて彷徨う、人間の意識作用の、恣意・自由に連想を働かせると言った性質、象徴機能を獲得し、その精神運動において言語的コミュニュケーションを進めていると理解される。）

---

[6] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P45　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

※象徴機能：記号表現と記号内容の結びつきが希薄であるもの，動機づけが少なく，記号表現と記号内容の関係づけが社会的な約束，慣習に基づくものを「象徴記号」と呼びます。意味するものと，意味されるモノの間の関係が自由な約束によって結びつくものが象徴記号であり，記号としての生産性・創造性を含んでいる。Ⅰ - 1 (hiroshima-u.ac.jp)

※「シーニョ」を構成する言語音声の最終的な構成単位である音素については、ヤコブソンが「固有の意味作用をもたないが、それらが相互に対立する体系の中で、この対立そのものによって、諸々の意味作用が生み出されるような単位である」「何よりもまず、対立的、相対的、否定的な実態である。[7]」としており、音響イメージを醸成する「シーニョ」の音素の配列関係（音）、その差異の二項対立的関係によって、括られ解釈された言語的な意味は、互いの関係性において、言語的な解釈の差異関係の世界で意味が配分されていると考えられる。

※1950 年、レヴィ＝ストロースの生涯の友ヤコブソンは、トルベツコイの音素の発見を踏まえて、世界中の言語音声を 12 対からなる弁別特性（二項対立）のセットとして整理をしているのだが、それはソシュールの言語の基本構造、その言語記号論の構造をなぞっているといえよう。音素の対立、二項対立する差異の関係において、音響イメージの差異を生じるものと考えられる。（**トゥルベツコイ**の主著 **/音韻論**の原理』は彼の死後 1939 年にプラハ言語サークルの論文集の第 7 巻として刊行されている。）

**② 記号としての「シーニョ」の抱える言語的意味について**

**記号とは**、「あるものが別のあるものの代わりとしてそれをあらわしている時、その働きは『記号機能』、そしてその働きを担っているもの[8]」であり、**記号のコードとは**「記号を、記号表現と記号内容を相関させる意味のあるシステムへ組織化する。」と説明されている。そして「コード」とは、ひとつの構造であり、「個々の独立したテクストを超越し、テクスト群を理解可能な枠組の中で結び付ける[9]」と説明されており、言語的コミュニュケーションの成立は、発信者と受意者に共通な了解に基づいた言語のコードあるいは決まりを、双方が理解しあっている事として理解される。コードとは記号とその意味・記号の結合の仕方についての規定である。

---

[7] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P69　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[8] 池上義彦『記号学への招待』P67　岩波新書 258　1998 年 7 月 15

[9] http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/japanese/sem08_japanese.html

人間の意識作用は、自らをとりまく外界に、ある差異を見出し、その自らの差異の感興を、ある「二項対立する差異の関係」において、その「二項対立関係」をもって、言語的意味として浮かびあがらせつつ、その心的動態において、言語音声（音素の配列・その集合体）「シーニョ」を、バロールの実践課程として、一筋につなぎつつ、進めるものとして理解される。

その言語記号の単位「シーニョ」は、「音」が「音響イメージ」として浮かび上がり、それが「言語的意味」と一体的に結びつく構成として理解され、その「音」の基本単位は音素であり、その構造が音韻論の側から定義されている。

※**音韻論**：言語活動の中で音が果たす任務に照らした音の研究。プラハ言語学派の中心人物の一人として、《音韻記述への手引 Anleitung zu Phonologischen Beschreibungen》(1935)，《音韻論要理 Grundzüge der Phonologie》(1939) によってプラハ言語学派音韻論の方向を定めたのがトルツベツコイであり、彼の定式化を踏まえて、ヤコブソンは戦後の 1950 年代になって言語音を 12 対の音素の特別特性（または示差的特徴）の束として整理している。

※亡命先のニューヨーク「高等学術自由学院」で、ソシュールのアイデア「差異の二項対立関係」についてレヴィ＝ストロースに伝えたのが、音韻論のヤコブソンであり、彼はレヴィ＝ストロースとの交流をふりかえって、「私は彼の講義は全て聴講し、彼も私の講義をすべて聴いていました。私はレヴィ＝ストロースに二項対立の問題に手引きをし、彼は言語と秩序という、トポロジー的現象に対して注意を向けてくれました」としている。(「世界」1976 年 11 月、ヤーコブソン/山口昌男の対談より)
**（トポロジーとは、**何らかの形（かたち。あるいは「空間」）を連続変形（伸ばしたり曲げたりすることはするが切ったり貼ったりはしないこと）しても保たれる性質（位相的性質または位相不変量）に焦点を当てたものである。ウィキペディア）

「シーニョ」は、音響イメージをもって言語的な意味と絆づけられている「言語の意味の単位」として定義され、**言語の体系内にグルーピング（群化）されて配置・格納されていると言う表現である。そのグルーピング（群化）の体系は「シーニョ」同士の差異の二項対立関係をもって、類推的秩序による関係を体現している。**

## 3．言語の線状性と恣意性

**① 言語の恣意性≒非自然性**[10]：

ソシュールは言語の二つの性質（恣意性と線状性）を指摘し、その二つの性質は、言語を発する場、言語表象時の人間の意識・精神機能の二つの軸に対応しているとする。

[10] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P125　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日同上

言語の性質の一つは恣意性であり、人間の言語能力（ランガージュ）は、自分を取り巻く外界、アモルフに連続的に広がる宇宙に対峙して、何だかの「差異関係の気付き」とともに、その気づきを「差異の二項対立関係」として構成し、そこから浮かび上がるところの、括り出されるところの志向対象を、精神機能の恣意なる展開において、「言語の意味」として表象する能力と理解される。その括り出された「シーニョ」を構成する「言語音」と「意味」結びつき、その絆は全くの自由、恣意であり、何の法則性もない、無意識からの指定あるのみとすされ、その恣意なる結びつき、自由度についてを、ソシュールは**「第一の恣意性」としている。**

それら「シーニョ」はラング（言語）の体系内に格納されているとの表現になり、ラングをディスクール（言語表現・言説）として活動化する言語表象という表現になり、次々に発語すべき「シーニョ」を、ラングという「宝庫」から選びとる人間の精神機能、類推作用を想定し、その働き方もまた「自由・恣意」（恣意性）としている。

次にそのラング内の「シーニョ」の格納の秩序は、類推的秩序による体系性を成しており、各「シーニョ」間の「差異の関係」・**「二項対立する差異の関係」**の「網の目[11]」としており、その「網の目」の「分節尺度の相対性、非自然性[12]」を、ソシュールは**言語の「第二の恣意性」**としている。

ソシュールは講義Ⅱにおいて「自然的基盤を一切有さない純粋価値体系としてのラングの体系[13]」、そのラングの体系内に「シーニョ」間の互いの「関係的同一性と差異」によって配置される言語の意味を説明している。「シーニョ」の倉庫・宝庫とされるラングの体系は、網の目の如くに「差異の二項対立関係」の体系をもって「群化」の構造をなしており、それはイメージの帯、範例関係、記憶の仕切り箱、内的宝庫とも形容されている。

そしてソシュールは「第二の恣意性」を〈価値〉の概念とともに導入しており、第二の恣意性は〈価値の恣意性〉として、その言語的意味を範囲を枠づけてゆく、言語表象の場のコンテクスト（状況）において揺れ動き、かつその言語表象する精神機能、恣意なる類推作用によって揺れ動くことが想定されているといえよう。

それは**「ある語がその周囲に持っているもの[14]」**の解釈として、その言語音表象の場にお

---

[11] 丸山圭三郎『ソシュールの思想 』P98　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[12] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P197　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[13] 丸山圭三、郎『ソシュールの思想 』P150　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

[14] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P234　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

けるコンテクスト（状況）、そして表象側の心的動態と言う二つの重ね合わせがあって、その言語表象する時空、時の推移を含意するならば、**「その語の周囲」**には、一つは言語使用する人々の発語発音に係る（連辞の領域）において、次に発する言語音（実体と言うべき音）の選択、その周囲には連辞的に連ねる音（実体）があり、その中で発語されよう。

そして同時に二つには恣意なる時空を超えて飛翔する発語者の精神機能、（連合の領域）においても、その場での揺れが有りえて、あるいは生まれいずる音声イメージに相当する想念（観念性）が生まれいずると言った時空が想定され得ると思われる。

その連辞と連合に係る二軸が想定され、それは重なり合いつつ、**こうして第二の恣意性には連合軸・連辞の軸の双方が重合しつつ動きあう事が想定され得ると思われ、**その時空において「シーニョ」の価値の配分は、「自らの絶対的特性によって定義される即時的な価値ではないのですから、その価値を生み出す源は、シーニョ相互間の差異だけという事になります。[15]」という事として、意味の配分、言語の価値が、括り取られるという事として理解される。

※言語の**第二の恣意性：**ラングの体系の性質として「一言語内の記号同士の横の関係（○↔○↔○）に見出されるもので、個々の辞項のもつ価値がその体系内に共存する他の辞項対立関係からのみ決定されると言う恣意性のこと[16]」と説明されている。
**※群化**：連辞・連合のいずれの分野においても見出されるカテゴリー化の働きで、ラングはこの体系によって構造化されている。
※**「第一の恣意性」と「第二の恣意性」**：「シーニョ」に抱えられる言語的意味は、「無意識からの指定あるのみ」とされ、言語の体系内の各「シーニョ」の間の関係性において、その意味の範囲（価値）が配分される、それがラングの体系、その構造である。

その事は「第一の恣意性」である「音」と「意味」の絆・その関係について「『第一の恣意性』は『第二の恣意性』のコロラリー、そのインプリケーションに過ぎない[17]」とされているように、言語の意味は、それぞれが発語し、反芻する人間の側の、それぞれの心的動態への「解釈」として、互いの意味が配分されるという「非実体」・「**非自然性[18]」である事が伺われるという事として、**名称目録論を否定し尽くしていると言えよう。

「シーニョ」の抱える意味は、揺らぎを抱えつつ、ラングに**群化して格納**されており、自

---

[15] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P235　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日
[16] 丸山圭三郎編『ソシュール小辞典』P86　大修館書店　1985 年 2 月 10 日
[17] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P200　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日
[18] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P125　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日同上

らの指向、差異への気づき、そうした心的動態への「解釈」として、「非実体」あるいは「非自然性」との表現である。

② **言語の線状性とラングの体系**

二つ目の言語の性質として、ソシュールは言語音発声という身体運動性の側からの要請としての、「言語の線状性」を指摘している。人間の言語能力（ランガージュ）は、（パロール：言語音声）を次々に繰り出して意味を伝え、呼びかけるのだが、この言語音発声は身体運動としての制約下にあって、一人の言語主体が同時に二筋、三筋を発声する事はできず、「一筋の時の流れ」に乗せて発音せねばならない。

こうした発声運動からの要請である言語の性質が「線状性」とされており、言語音（母音・子音）の発声機序としての、人体の咽頭、声帯などの関連する身体組織の構造上の制約下、刻々と一筋の糸として時の流れに沿って、次々に選び繋がねばならない。そのために音素の連続体としての言語音声表象において、その言語音声（シニフィーエ）配列は、その発声上の難易度などに係わる、習慣性、言語集団的な傾向性が影響しているのであろうが、音声言語表象（発声）における基本的な性質としての言語の二つ目の性質、線状性が示される。

※各「シーニョ」は、類推作用の要請をもってラングに「群化[19]」されて格納されており、それぞれの「シーニョ」の音声（シニフィアン）は線状性に拘束されつつ潜在的に他のシーニョと結びつく〈結合価[20]〉を担っているとされる。各「シーニョ」はさまざまな「連辞の型」を生み出す可能態とされている。

「シーニョ」は、言語音の基本的な構成要素である音素の配列関係、音素集合（シニフィアン）という実質・実体の連続過程としての音の集合だが、その中に音と一体的に抱えられた言語的意味は、人間の象徴機応の働きによるひとつの指向において、その解釈として、さまざまに変容し得るところの、形相性を示し出すところの、人間の観念が産み出すところの「意味の範囲」であり、その揺れを抱えつつの概念性として考えられる。その非実体性において、そしてそれら「シーニョ」を群化（グルーピング）の様相で格納するラングの体系において、それら「シーニョ」の互いの差異の関係において言語的な意味は配分されるという。

この非実体である言語的な意味を抱えた「シーニョ」は、ラング（言語）の体系に格納さると言う表現であり、その体系内の各「シーニョ」間の関係が、それぞれの「シーニョ」の抱える意味の範囲を配分する、それがラング（言語）の体系である。

---

[19]丸山圭三郎『ソシュールを読む』P167　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[20] 同上　p 87

あらためて「シーニョ」は音素が構成する記号的な構成であり、恣意に分節され、結合され得る基本構造をなしている。言語の線状性の下で、「シーニョ」同士の結合・分節を進める人間の精神機能（ランガージュ）の実践課程、その音声表象としての「パロール」であり、一つの「シーニョ」、そして結合された「複数のシーニョ（辞項）」の音素配列を進める場面で、言語の線状性の要請が機能する。

パロールの流れは、精神機能が、類推的（恣意性をもって）に選び取られた「シーニョ」を、（線状性をもって）「分節」し「結合」しつつ進むのだが、その音声言語表象は、発音上の難易度や発語の習慣性において、発声過程での習慣性を言語集団的に浸透、敷衍し、あるいは集団的に受け入れつつの経過をとおして、やがて大脳の神経伝達系に入るところまでに至った場合にこそ、「意識に届いた」と言う表現に重なり合い、その集合としての言語の体系が想定され、やがて言語体系の共時変換として定着するところまで至る、それが言語の体系の構築過程であり、言語の線状性との関係であろうと思われる。

## 4. 言語を繰る人間の意識について

① 言語の恣意性・線状性と人間の意識

上記言語を駆動する人間の意識作用として、言語の二つの性質（線状性と恣意性）に対応する二つの軸が想定されている事は前述のとおりである。

一つは類推作用の**恣意性に対応する「連合の軸」**であり、ラング（言語）の体系性はこの軸による「群化」を成す構造化を獲得しているとされる。この（連合の軸）は意識上の活動として、パロールの実践、あるいはラングがディスクールとして活動化される言語表象時に、次に発すべき「シーニョ」あるいは「辞項」を、ラングの体系から選び取る精神機能でもあり、自由「恣意」に展開する軸として、言語の一方の性質（恣意性）を機能せしめる。

二つ目は、言語の**線状性に対応する「連辞の軸」**であり、言語音声発声運動上の制約の下での言語音発声に係わる規定性、拘束状態ともいえよう。それは言語音声を時の流れに従い一筋の糸として連ねる（線状性・継時性）という要請に沿って、身体運動（発声運動）に係わる軸としての機能であり、無意識的（意識下）に働くとされている。

言語使用に係わる人間の精神作用について、ディスクールの要請によって口にするものすべてはパロールであり、その展開は恣意・自由・類推的に次に発すべき「シーニョ」を選びとる動き、その連合の軸と、発声運動上の制約条件（咽頭の構造、筋肉運動的側面等）にである連辞の軸、その双方の動きにおいて、言語の発声過程は互いに重なり合いつつ、制約されつつ、進行する言語表象であろうと思われる。

表象者は同時に二筋のパロールを発し得ないので、一筋の時の流れに乗せて「シーニョ」を連ねざるを得ず、言語の「恣意性」に対して「線状性」が一定の限定を課しつつ進行する

音声言語表象、その進行と思われる。この二つの性質を重ね合わせつつ、互いに影響しあいつつ、二つの精神機能の同時発動、重ね合いの中で進む、言語表象の展開課程が想定される。

**②人間の意識活動の中の連辞の軸・連合の軸：**

ソシュールは、言語の二つの性質に係わり、能動的な二つの精神機能の軸として、連辞（線状性）と連合（類推作用・恣意性）の軸を想定している。

この二つは人間の全般的な精神機能の二つの軸に同調しているとされ、ひとつは人間の概念化作用、抽象化作用に係わる軸として、恣意なる動きをする類推作用に係わる意識上で働く「連合の軸」である。他方は、言語音声の発声運動に係わり、音声を一筋の時の流れにのせて連ねるという、の発声運藤（身体運動）に係わる、意識下で働く連辞の軸である。

言語表象の場で次々と「シーニョ」を選びとる精神機能（連合の軸）は意識上で進み、刻々と「シーニョ」を恣意、自由に選び取りつつ、そして同時に意識下では連辞の軸が、選ばれつつある各「シーニョ」を、結合へと分節を進めつつ、そうした言語音声の発声過程は、バロールの一筋の時の流れにおいて進んでゆく、そうした言語音声の発声過程が説明される。

後者の「連辞の軸」の発現としての「連辞の型」について「単に常套句としての型をさしているのではなく、連合関係に置かれたすべての語は、先にも見たように形態と機能の一体化したシーニョなのですから、潜在的に別のシーニョと結びつき得る〈結合価〉valence を担っていて、さまざまな連辞の型を生み出す可能態である[21]」と説明されている。

「線状性」は身体運動としての発語運動からの要請、言語音発声上の習慣、発語しやすさ等の影響下にあって、その結果としての「辞項の型」を形成する可能態としての「シーニョ」であり、その結合を実現する連辞の軸は「無意識（意識下）で動く」とされる。

**③　連辞の軸・連合の軸の同時駆動**

この無意識で働いている連辞の軸の発現形態として、言語音発声時に、「シーニョ」同士が結びつく「型」をなした「辞項」が想定される。「我々が語るのは、連辞によってのみである。そのメカニズムは恐らく、我々が連辞の型を頭脳の中に持っていて、それらの型を用いる時に連合語群を加入させているのである[22]。」と説明されている。その渦中で、次に発声すべき「シーニョ」を類推的に選び取るべく、意識上で恣意に動くのが連合の軸である。

これら二つの軸は同時駆動しつつ、恣意性を線状性が限定しつつ、同時に 2 つの機能は重なり合いながらの言語表象が進められていると理解され、自由・恣意に展開して類推的に

---

[21] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P172　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日同上

[22] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P168　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

「シーニョ」を選び取る精神作用は、発声運動上の制約条件により、いわば線状性に限定されつつ、一定の規律づけを果たしつつの言語表象の過程であろう。**意識上で恣意に動く類推作用**が、**意識下での発声運動上の制約、線状性**により限定され、その双方が、言語表象を型付け、規則付けつつ、ラングの「構成された構造[23]」によりつつのディスクール活動が進むものとして想定されよう。無意識に進む意識下からの限定性が、言語音の発声過程を限定、拘束し、それは無意識に進むとして理解される。

※**言語的意味の創出過程：**連合、連辞の二つの軸の同時駆動の中で言語表象が進行すると言う時間経過、二つの性質の相互関連性、葛藤性、連動性において生まれる新しい「シーニョ」が想定されている。「音」と「意味」が一体的に絆づけられた「シーニョ」、その連なりとしての連辞の過程に何だかの「揺らぎ」が生じるならば、「シーニョ」間の関係性、その「差異の二項対立関係」のずれ込み、その網の目としての体系性のズレこみ、その言語集団的な浸透と敷衍、それら一連の動きが、新たな言語的意味の創出過程へ、そして言語の通時、共時変換として想定されると理解される。その「シーニョ」の意味の幅が「価値」であり、連辞・連合の二つの軸の重ねられつつの動きの中で確定へと動くものであろう。

**※人間意識の複層性**：「恣意性」と「線状性」は言語表象時に同時駆動して、「恣意性」を「線状性」が限定しつつ、重なり合い連動しつつ言語表象が進行するとして、それは人間意識の無意識とされる活動を含んでおり、人間精神の階層性、複相性において互いに連動する人間意識の駆動様態として理解される。それらはフロイドの無意識、ユングの集合的無意識などとして示されている、人間精神の複層性、記憶を抱えた存在としての人類の心的動態であろうが、言語表象に係わる人間の精神機能においては、従って何処までが意識上なのか下なのかについて、人間意識の複層性と、その構造と共にあると言うべきであろう。

※フロイドの無意識に対して、『夢判断』の以前の人と思われるソシュールの「意識下」：この表現は、発声運動、その身体運動性において、咽頭の構造等による母音子音の発声上の制約関係が関与して生じると思われる、発音・発声上の習慣性等、発語者の無意識的、非自覚的な発声をコントロールする動きを取り出して、意識下と表現しているものと思われ、抗いがたく、かつ偶然性に流され得るとも考えられる。

しかしながら言語の恣意性とは、観念作用としての自由度であり、観念作用が社会的に構築した膨大な共同幻想、その幻想との関係で体はなく、観念の動態、飛翔する動態を指していると思われる。観念の絶対性などとして語られる、人間の観念世界、その産みだした観念世界とその覆い尽くされる思考をさすのではなく、人間の観念の動態を指している。

---

[23] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P171　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

## 5．記号論としてのソシュールの言語論：

再掲 P3.4：記号について：「あるものが別のあるものの代わりとしてそれをあらわしている時、その働きは『記号機能』、そしてその働きを担っているものは記号と呼ばれる。[24]」のであり、記号のコードとは「記号を、記号表現と記号内容を相関させる意味のあるシステムへ組織化する。」と説明されている。そして「コード」とは、ひとつの構造であり、「個々の独立したテクストを超越し、テクスト群を理解可能な枠組の中で結び付ける[25]」と説明されており、言語的コミュニュケーションの成立は、発信者と受意者に共通な了解に基づいた言語のコードあるいは決まりを、双方が理解しあっているからと理解される。コードとは記号とその意味・記号の結合の仕方についての規定である。

ヤコブソンは 12 対の音素の特別弁性・(または示差的特徴) の束：人間の意識がその対立を識別する 12 対の音素を示差的特徴とする言語音声の構造を示している。ソシュールの「シーニョ」は、「シーニョ」を構成する音素配列関係の差異を、「音響イメージ」の差異として聞き分けられるような、音素の配列関係によって意味を抱える記号的な単位である。

**（分節言語）二重分節　double articulation：**コミュニケーション活動の基本的な単位を文とするとき、文が 2 段階にわたって組み立てられていることを人間の言語の大きな特徴であるとしてとらえた概念。フランスの構造主義言語学者アンドレ・マルチネ A. Martinet が提唱した。

文は、意味を持つ部分に分けられ（第一分節、語 ・形態素 ）、その意味を持つ部分は音素という意味のない言語の最小単位（第二分節）に分けられる。数十の有限の音素から、数十万の語が形成され、語を組み合わせることによって無限の現象を文として産出できる。言語の持つ経済性（有限の素材）と創造性（無限の現象）の基礎をなす。
（terms double articulation 二重分節（soka.ac.jp）：言語学者 A.マルティネによって提唱された人間言語の特徴。文（発話）は，意味をもつ最小の単位である記号素 moneme に分析され（第 1 次分節），次に記号素は，意味を区別する最小の単位である音素 phoneme に分析される（第 2 次分節）。（ブリタニカ国際大百科事典）

① 言語の意味の単位「シーニョ」の記号的構成のもたらす事
「シーニョ」の音素配列は、無限のバリエーションを構成し得る 12 対の弁別特性の束で

---

[24] 池上義彦『記号学への招待』P67　岩波新書 258　1998 年 7 月 15

[25] http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/japanese/sem08_japanese.html

あり、12 対の示差標識で区別され得る言語音声の集合であり、その配列関係は、無限のバリエーションにおいて言語の意味を抱え得る構成であり、それが言語の記号的構成である。

その音響の差異を聞き取る人間の聴覚は、外界の多様な音の中から言語音声を、そしてその言語音声の音素配列関係から「音響イメージ」を湧出しつつ、そのイメージと言語的意味とを一体的に絆付けつつ、自らの「差異の感興」、あるいは心的動態、あるいは自らの指向対象、気付きについての「解釈」を、言語的な意味として抱える「シーニョ」として構成する、そうした精神機能、ランガージュが措定されている。言語の記号的な構成は、その「差異の感興」を、あるいは心的動態を、その時々刻々の動きを捕捉しつつの言語表象としての、音素の配列関係を刻々と構成しつつ、音声言語の表象過程であり、この動態を可能ならしめる構成こそが、音素の配列関係としての言語の記号的な構成、と言えよう。

それぞれの音響イメージの差異は、音素の配列関係による聞き分け、「差異への感興」として、言語の記号的な構成故に、恣意に展開しうるのであり、時空を超える人間の精神機能、「恣意なる心的動態」を、トレースする事を可能ならしめていると言えよう。

言語的世界、言語的表象は眼前の事実を超えて、象徴機能の働きのままに、刻々と動く心的動態にそうて、その「解釈」を括りだし得るのだが、それは 12 対の示唆標識としての音素の配列関係として、時々刻々と発語する記号的構成のゆえといえよう。

「シーニョ」の記号的構成においては、音素の配列関係の差異が、音響イメージの差異として、聴覚的に響き分けられつつ意味を聞き取られ、聞き分けられるものして理解される。言語使用の場で、その聞き分ける人間意識のありようは、ソシュールの表現としての「意識に届く」と重なると考えられる。

② 「シーニョ」の象徴記号性と社会的コードとしてのラングの体系

上述「シーニョ」同士の「二項対立する差異の関係」、その網の目と言う表現で、「ラング（言語）の体系」が示されており、「ラング（言語)」は「シーニョ」を格納する記憶の装置、宝庫とも形容されている。

「シーニョ」は①シニフィエ（言語的意味）②シニフィアン（言語音）を一体的に抱える記号的な言語の意味の単位であり、②の音声が音響イメージを醸成し、それを言語的意味と一体的に絆づけられる言語の意味としての単位であり、それらの「シーニョ」の格納庫、宝庫とされているラング（言語）の体系である。「シーニョ」は類推的秩序に従う「群化」・グルーピングの構成で格納されていると説明されている。ランガージュ（言語能力）の駆動において、ディスクールとして活動化されるにあたり、この体系は類推的秩序をもってする人間の精神機能の動きと同調的な格納の様式にあると理解される。

※ディククール：言語学用語。「言説」「言述」と訳されることもある。抽象的な体系としてのラングに対する概念で，一つのメッセージを形成する言語表現の総体をさす。言語学者 E. バンベニストは，記号を単位とする閉じられた「ラングの言語学」を批判して，文を重視する「ディスクールの言語学」を提唱した。（ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典）

さらにラング（言語）とは、パロール（言語音声）の実践において、各「シーニョ」、選び取られた「シーニョ」間の絆づけをするコードの体系として、母国語集団において共通な、社会集団的に浸透し、敷衍している体系であり、それは心的にあるは脳機能に抱えられていると考えられ、それは母国語集団において集団的・社会的に構築された体系といえよう。

そして、そうした「シーニョ」の構成、その格納庫とされるラングの体系は、母国語集団の言語使用のルールとして集団内の個々の言語表象を規律する、その深さについては、**惰性化**という表現である。おそらく長い地質学的な時間経過における言語使用の集合として、その集団内諸個人の言語使用の慣習なりが蓄積、沈殿、社会的な構築過程を経ており、それゆえの深く惰性化された体系性として、人類の身体性（大脳容量の増大）へと至りえた言語の体系の構築過程において、機能し続けている言語（ラング）と言えよう。

③　言語的コミュニュケーションと言語の体系（第二の恣意性と線状性）

「記号とは，ある表現が別のものを代理する（意味する）ものであり，記号表現（表現）と記号内容（意味）からできています。」「たとえば「ネコ(neko)」という音が記号表現，猫という対象（あるいは概念）が記号内容に対応します」と説明されている。言語のコードは類推的秩序に適う、恣意的な構成であり、各母国語言語のコードは、社会集団において形成され、社会的に構築されている体系性を抱えていると理解される。

言語の「音と意味」の間の絆は、各言語ごとに違っていて、必然的理由付けができない恣意、自由な関連性であり、その性質を、ソシュールは「第一の恣意性」としている事は前述のとおりである。この性質は各々の社会集団（母国語集団）が、「約束ごとで多種多様に作っていけるからこそ、新しい単語、新しい表現を創造的に作り出すことができるわけです。意味するものと，意味されるモノの間の関係が自由な約束によって 結びつくものが象徴記号であり，記号としての生産性・創造性を含んでいるのです。[26]」とされている。

また言語使用の場の「状況」「前後関係」「脈絡」等コンテクストの共有が、意味の共有、理

---

[26]　吉田光演　Ｉ－１（hiroshima-u.ac.jp）
ことばの意味とはなにか ― 象徴記号としての言語の創造性　P6

解の上で背景要因として機能する事は他の動物とも同様であろうが、人間における言語の場合はコンテクストを越えて離れた内容を表現しうる事、「現前の事実」に縛られず、時空を超えた内容をも表現する象徴機能、それが人間の言語的コミュニケーションの特徴と言えよう。**それは言語の恣意性の効果、連合の軸の効果と思われる。**

④　コミュニュケーションと言語の体系と第二の恣意性

ラング（言語）は、「シーニョ」間の互いの「差異の二項関係」を類推的秩序で格納する倉庫という形容であり、その恣意に構成され、新たな意味を創出しつつある、それら「シーニョ」間の関係の網の目として言語の体系が示されている。

その言語の体系は、「記号を、記号表現と記号内容を相関させる意味のあるシステムへ組織化する。[27]」ところの「コード」としての体系であり、記号内容、言語的意味の単位「シーニョ」は、この体系の中でこそ言語的意味を担っている。言語の意味は、眼前の事物をなぞる、名称目録としてではなく、言語の体系の中で配置されて生まれ、布置される「世界理解」「解釈」の中にある。

その事は「ラングが、記号論的事象を特徴づける恣意性という性質を、最も徹底した形で示している[28]」とされており、音が言語的意味を担っているという、この二つ（音と意味）の間の絆・その間の関係、それは全くの無法則性、「恣意」性によって、このコードは各々の文化集団において、それぞれ恣意、自由な体系として構築され、言語的意味を括っている事、その体系として理解されている。

言語の第一の恣意性は記号学的原理によって成り立ち得る、そして第二の恣意性は、「シーニョ」間の結合と分節の恣意性によってなりたちつつ、線状性からの習慣性を抱えており、集団的に構築された体系の性質である。それは音素の配列関係、音素集合としての各「シーニョ」を分節、括り分ける場面で、その分節の自由度、恣意性をもって新たな意味を生成する事を可能にしており、それは大脳の神経伝達系に入るところまで至りつつ、その構造が集団的な浸透、敷衍をもって構築される言語体系性の構造、その特性を産ましめている。

この場面でラングの記号的構成は言語使用上の変化、動態、その要請を、刻々と刻み得る、「音素の配列関係」の集合であり、その記号構成的な効果としての言語の恣意性の表象の実現、そうした展開の自由度という相互関連性が理解される。言語が「記号論的事象を特徴づ

---

27　初心者のための記号論：コード（visual-memory.co.uk）　2020/10/01

28　柴田　健志　ソシュール言語学　と「主体」の問題
KJ00000047102.pdf (kyoto-u.ac.jp)　2020/10/01

ける恣意性という性質を、最も徹底した形で示している[29]」とされるのは、「シニフィエ」の音という実体に支えられつつある一方で、関係概念としての言語的意味の非実体性を抱えるという、そしてそれが記号的な構成で結びいているという、その言語の世界性を示しているといえよう。

## 6　場のコンテクストと言語の恣意性と言語的コミュニュケーション

①　記号的コミュニュケーション

記号によるコミュニュケーション一般を考えると、情報の共有に係わって「送り手と受け手は，共通する記号の体系（コード）を用いて，コード化（記号内容→記号表現への変換）とコード解読（記号表現→記号内容への変換）を行う必要がある。」とされる。そして送り手と受け手を取り巻くコンテクスト（状況，その場にある物，背景知識）もまた、互いの意思疎通のための重要な役割を担っており、その事は他の生物同士のミュニュケーション同様に、人間においても状況の共有によって意思疎通は促進される。

しかし人間の場合の言語によるコミュニケーションは、場（コンテクスト）に束縛されずに自由な展開が可能であり、この点が言語はコミュニケーションの道具でありつつ、象徴記号としての言語には、「現前の事実」あるいは言語使用の場、コンテクスト（文脈、脈絡、状況等）を超えた展開を進め得るという性質があり、その事が言語記号としての特徴的といえよう。

記号としての言語の構成において、まず「シーニョ」という記号的単位における「第一の恣意性」は音と意味を恣意的に繋いでおり、さらに「シーニョ」同士の関係における恣意性である「第二の恣意性」において、コンテクスト（会話の現場・文脈、脈絡、状況等）を離れて想像力を働かし得る人間の精神機能、象徴機能の展開とともに、言語表象は時空を超えて、実体、現前の事実を超えて、象徴機能の恣意なる自由な動きを伴う意味創造・意味理解の展開課程を可能ならしめてる、その恣意なる展開過程を刻々と追いかけ得るのが、言語の記号的構成によるコミュニュケーションの展開と言えよう。

再掲※象徴機能：記号表現と記号内容の結びつきが希薄であるもの，動機づけが少なく，記号表現と記号内容の関係づけが社会的な約束，慣習に基づくものを「象徴記号」と呼びます。意味するものと，意味されるモノの間の関係が自由な約束によって結びつくものが象徴記号であり，記号としての生産性・創造性を含んでいる。Ⅰ－1（hiroshima-u.ac.jp）

②　言語の記号的構成とその体系・言語のコード〈象徴機能・概念化作用との関係〉

---

[29] 同上　　KJ00000047102.pdf (kyoto-u.ac.jp)　2020/10/01

言語の体系は、言語の意味の単位である「シーニョ」を格納する体系であり、格納の様式は人間の類推作用を駆動する連合の軸によるグルーピング（群化）にそっている。あるいは「群化の構造」は、人間の言語使用の場において、「ディスクール」の実践課程、バロールを実行する動きにおいて「シーニョ」を選び取る、類推作用の展開課程と同調的である。

そして人間の意識作用は「二項対立する差異の関係」として括られた、生活世界・外界・実質（substance）への「解釈」、その言語的意味と言うべき概念性、言語的意味を、その「シーニョ」として「無意識からの指定」によって表象し、それらは「恣意なる類推過程」に同調的な体系性において、ラングに格納されているとする。そのラング体系内の「群化（グルーピング）」において、必要なあるいは妥当な「シーニョ」を選びとり、線状性の拘束下で分節し結合し、ディスクールの要請に沿いつつ、パロールの連鎖を進めるところの音声言語の表象過程、コミュニュケーション過程と想定される。

この場での類推作用の時空を超える動きは、言語的意味の絆づけ、概念化、抽象化への動き、象徴機能の展開へと深まりつつ、新たな言語的な意味の醸成を引きおこす事などが想定されるであろう。それらの記憶が「シーニョ」の格納庫として、宝庫とも形容される言語体系内に蓄積、母国語集団的に社会的に浸透、敷衍して、集団的に構築されていると理解されよう。

ざまざまな概念を絆づけつつ、人間の精神機能はその時空をこえる展開の中で、コンテクスト（場の状況）を越えてディスクールを創出する、そのランガージュの動きの中で「シーニョ」群の宝庫とされる、ラングの体系は「記憶の倉庫」としてバロールの連鎖を規律しているものとして想定され得るであろう。

その表象される言語の構成は、現下 IT 時代の到来の中で、二項対立する on/off の信号に同調する、記号的、非自然的、「没現前の事実的」な構成であり、言語表象、その動きは記号的構成をもって、恣意に展開し、自由な連動を可能ならしめている。

「シーニョ」は音素の 12 対の示差標識の束であり、その長短も配列関係も恣意であり、無限のバリエーションが想定されうる構成である。無限に音響イメージを構成可能な記号形式といえるところで、その「シーニョ」の連鎖を構成するパロール活動において、恣意に「シーニョ」を配列し、辞項となして連鎖として括りとる自由度、恣意性をもって、ディスクールの実践を刻々と進める人間の意識（言語能力）と共にある言語の体系といえよう。

「言語学者 N・チョムスキーは，無限の文を作り出す文法を「生成文法」と名づけ ，言語の文は，単純な句を繰り返し組み立てていく普遍的な生成の規則によって成り立っており，

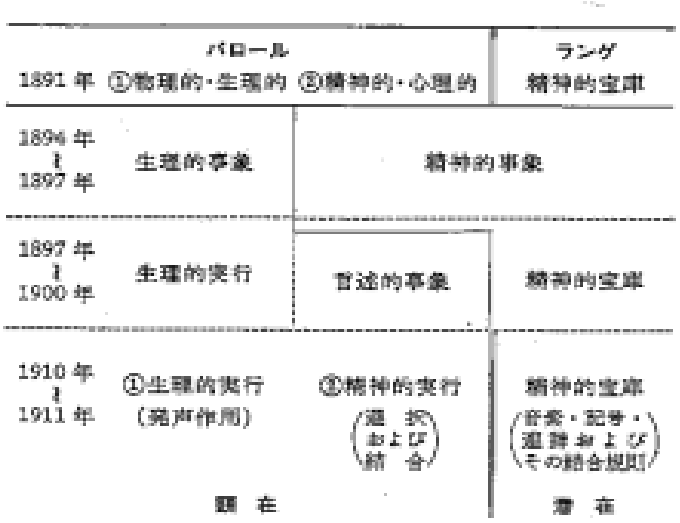
人間の子供はその規則を生まれながらにして脳内に組み込んでいるのだと主張しました[30]」との事である。この言語の性質もまた、その網（形相）の構成自体に見られる「分節尺度の相対性、象徴記号（シンボル： symbol)としてのラングの体系の恣意性の故であろう。

③　言語的コミュニュケーションの話し手と聞き手：
「ソシュール言語学における発話理論の欠如」という指摘も見られる中で、ソシュール言語論における「聴き手」への照準について、その周辺についての検討をすすめようと考える。

「シニフィーエ（意味)」は聴覚イメージと絆づけられており、確かに聞き手に照準が当たる構成に受け取れるであろう。また発声運動は身体運動の制御と共に動くのであろうから、言語の線状性は意識下での動きと想定されている事もうなづけよう。それらを踏まえながら、発語者側の意識について、ソシュールの第三講義のパロールとラングの境界線の移し変え[31]について考察を進めたい。

丸山圭三郎の『ソシュールの思想』P87 の表によれば、ショシュールは晩年（1910～1911 年に、パロールとラングの機能の境界線の移動をしており、①物理的・生理的②精神的・心理的③精神的宝庫という 3 区分を設定する中で、②についてラングからバロールの側に移動を記している。

『ソシュールの思想』P87 の図




上記の図において、パロールの機能に注目すると、1897～1900 という中期においてはパロ

[30] 吉田光演　「ことばの意味とはなにか ― 象徴記号としての言語の創造性」
Ⅰ‐1（hiroshima-u.ac.jp）　20210701

[31] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P87　岩波書店　1989 年 10 月 16

ールの機能の中に①生理的事象に加えて②に相当する言述的事象＝（精神的実行―選択および結合）が繰り入れられつつも、境界線が設定されている。そして 1910 年以降（晩年）には**①生理的実行（発声作用）と②精神的実行（選択及び結合）の双方をパロールの機能として合同**している。

この変化は、晩年のショシュールにおいて、ラングの機能としては**潜在的な精神的宝庫**として限定し、他方のパロールの機能として一つは「音素・記号・連辞及びその**結合**」に加えて、二つ目の「**選択**」を精神的実行の範疇としてパロールの機能に組み入れている。

ここでパロールの活動とは言語表象側の言語音の発声活動であり、そのパロールは「シーニョ」の選択と結合を果たして発声を進めるとの理解に落ち着いたと理解される。選択とは類推作用（恣意性）をもって動き、結合は「シーニョ」間の結合として辞項の形成過程、連辞の軸による動き（線状性）と理解され、そこでパロールの動きとしては身体運動的な発声作用に加えて精神機機能（選択）の双方を組み込んで進むとの理解になろう。それら言語表象に係わる、線状性と恣意性に係わるところ、いわば言語表象の実践課程、進行過程の総体がパロールとして纏められている。

ラングはパロール、言語音発声を規定する、社会的に構築された所の「連辞及びその結合規則」等の、言語集団的に蓄積、構築された、文法的な規則性などを担って、その機能をもって連合の軸（恣意性を体現する）に同調的に、「シーニョ」を「群化」的に蓄えてる体系と理解される。

言語の二つの性質（恣意性と線状性）は、その性質の発現に係る精神機能（連辞と連合の軸）の働きは複層的であり、その下でのパロールの活動であると理解されよう。その**言語表象側の二つの精神機能は複層的な構造としてあるところから、言語使用の場の力動の中での発語の経過において、言語表象はパロールの線状的に配列される場での、恣意性の働きとの重合的構造であろうと思われる。それが、言語の表象側、話し手に係わるパロールを組み立て、その音素配列関係のサーベイ、追跡と言ったランガージュの活動態の理解になろう。**

そして意味を理解する側、コミュニュケーションにおける聞き手においては、その音声を聴覚像という心的イメージへと繋いで概念化へ向かうと言う構成であり、聞き分ける意識は、音素配列の差異による音響イメージの差異への感興を、言語のコードにおいて、次々に発せられる言語音を、継時的（刻々と）に一筋の流れに乗せるべく、連辞の軸（線状性）において、意味に繋ぐことが想定されている。そのパロールは、選択と結合という、言語の使用に係わる二つの機能を動員しつつ進める実践課程としての理解であろう。

ソシュールの言語論においては聞き手側の言語使用の場での精神機能は、音響イメージへと向かう音素配列を識別する、「シーニョ」間の「差異の二項対立関係」を刻々読み取る線状的な流れにおいて、類推的に、ある聴覚像へと収斂させる動態と思われる。発語側においては、この精神機能は連辞関係と連合関係という言語の性質（秩序）に従って言語表象する過程として、言語を表象する側の、類推的にラングの宝庫から「シーニョ」を選びとり、連辞の軸に拘束されつつ、刻々と線状的に発生・発語するのだが、それは「ディスクールの要請によって口にされるものすべてのもの[32]」パロールとして表象されるであろう。

コミュニュケーションする双方の精神機能において、「シーニョ」の音素配列を線状的に追いかけつつ、分節しつつ、結合やそのずれ込み、差異関係を重ねつつの、言語表象側（発語側）・意味を聞き取る側の動態、この「音素配列を線状的に追いかける」という同じ動態、精神機能（能力）の重ね合わせとして、言語的コミュニュケーションが想定されよう。

言語表象側、聞き取る側が、刻々と進める言語音声の、区切り方（分節）と結合の仕方によって、「シーニョ」間の絆を問いかけつつ動きあう、ランガージュの駆動様態、言語使用の場で、ラングの体系によりつつの、言語の恣意性を線状性が限定しつつ動く、言語的コミュニュケーションの有り様と考えられる。

※我々は言語記号の半面をなすシニフィアン（音声面）が、ソシュールにおいてなぜ「調音像」ではなく「聴覚像」なのかを、ソシュールの言語概念が聴き手の立場に定位していることから説明した（末永、1998）。[33]」との指摘もみられる。ソシュールにおける言語記号、あるいは言語について「話し手の側にではなく、耳に響くものとして聴き手の側に見いだされるのである。」との観点が示されている。

※ 「聴き手の「聴取」もまた一つの「言語行為」であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする「解読作業」である。ここで働くのが、ソシュー ルが「配列作用」と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの「存在理由」がある。[34]」

「そして言語音を聞いて理解するとは、 物理現象としての音声（一人一人異なる声色）を聴覚像という心的パターンへと変換し、届いたその複数の聴覚像を連辞関係と連合関係と

---

[32] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P88　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日

[33] 末永朱胤
https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-30-05.pdf

[34] 同上　P96

いう言語の秩序にしたがって整理すること[35]」とされ、それは**その言語音の配列関係のサーベイ、差異を聞き分け、整理するシステム、「分節と配列の秩序」としてのラングのコード**であろうと思われる。

「ソシュールは聴き手が受け取った音声（まだこの段階では「物理音」である）が、言語のメカニズムによって心的・社会的なものとしての記号（聴覚像と概念の結合としての）に、配列と言う作用を通して変換するシステムに言語の本質を見ている。[36]」との事だが、「シーニョ」の構成音素の配列関係の差異、それは線状性の要請であろうから、分節もまた線状性の要請下でありつつも、恣意に分節が進むという中で、線状性と恣意性の相互作用、重合的な動きにおいて、その二つの性質の交錯、その集団的な言語使用の中の重層関係、その歴史経過が想定されると思われる。

④　話し手におけるランガージュ

そして発語側において、ディスクールの要請とされる心的動態をどう解釈するのかについては、その動態が先行するたとえば生物性（生命維持と生殖願望）なりの情動、文化性としての交流への願望などを予定できるのかどうか、断定はできないであろうが、話し手においては、「シーニョ」の配列関係、「シーニョ」間の絆づけを動かすものは、ランガージュであろうと思われる。そして話し手においても、聴き手においても、「音素」集合なり、「シーニョ」集合なりの配列関係、順列関係をもって、パロールの実践を組み立てる所の、人間の言語能力（ランガージュ活動）は想定されている。したがって聴き手、話し手において、音素・音素集合としての「シーニョ」の配列関係をサーベイして、言語的意味なり、ディスクールなりに落す機能としての言語能力として、ランガージュの機能を定義づけることができるのではないだろうか。

このことは、言語表象側、意味を受け取る側の双方において、時々刻々に記号的単位を構成する音素の配列、その「シーニョ」を追いかける、サーベイする意識が動き、そしてそれは線状性の拘束の下で分節と結合を進める作業と連動的であるがゆえに、いわば一つのコードを互いに抱えて重なり合うが故に、言語的なコミュニュケーションが成立すると言えよう。そしてその流れは線状性からの拘束状態によって限定されて生じる規則性を抱えざるを得ないという、この身体運動性（生物性）と精神運動性（恣意性）の葛藤状態において、音声表象のコード（ラング）使用の意味合い、機能が進行すると言えよう。

⑤　ディスクールの要請と、ランガージュの重ね合い

---

[35] 同上　P91

[36] 同上　P92-P93

そこでランガージュ・言語能力は人間の自由、恣意なる精神機能の時々刻々の動きを追走する事を人間に可能ならしめる、言語の記号的形式故に、現前の事実ならざる、コンテクストを越えて飛翔する人間の意識の流れ、恣意、自由な流れ、思考を、表象可能な音声言語の体系として、その体系であるラング（言語）を二次産物として構築しつつ、共時変換過程にあるといえよう。丸山の表現によれば、その表象は記号的構成であり、その言語記号の性質は、離散的、デジタル的[37]とされている。

人間の時空を超えて広がる象徴記号の展開を追走可能な形式として、その動きが言語能力（ランガージュ）の駆動態として、言語表象する発語の機序として、同時に聞き取る機序として、重なり合うランガージュ（言語能力）駆動が想定される。この能力は言語のコードによって絆づけられて配列される「シーニョ」の配列関係、分節しつつ配列しつつ、言語の音素を追いかけつつ、ディスクール活動として編み込む能力と想定される。それらの話し手、聴き手双方において、重なり合うランガージュの駆動において言語の体系は、揺らぎつつ変換を余儀なくされつつ、増幅されつつの、コミュニュケーション過程、母国語集団を網羅する量的な重なり合いがイメージされる。

そしてこの言語能力ランガージュは、音声言語表象において、音素の配列関係を、「線状性」からの規定性、拘束下において、恣意性をもって「シーニョ」を選びとり分節しつつ、言語のコードに意味を揺るがせられつつ、選びつつの発語を、或いは意味の重ね合いをすすめていると理解される。

（ディスクール活動の動因は人類の自然生物性（自己維持と自己複製）そして社会文化性（集団内ミュニュケーション願望）の双方として想定されようが、そのラングの体系は恣意性を線状性が限定しつつ動き、その言語集団的に構築され、その慣習性をかかえつつの社会的構築されるところの人類の心的、大脳機能的に、社会集団的に構築された体系であり、それを実働化する能力としてのランガージュとして理解されよう。

※**ディノテーション・コノテーションについて**：記号が意味を指し示す方法として、デノテーションとコノテーションがある。「バラ」という記号が、バラ科の植物一般を示すものとして用いられるとき、その意味はデノテーションされているが、その記号によって、例えば「愛」や「情熱」などの象徴的意味が付随して理解される場合には、その意味はコノテーションとして示される。すなわち、ひとつの記号によって、それが属する記号体系の中で割り与えられた意味が明示的な仕方で示されることがデノテーションであり、何らかの意味が明示的ではない仕方でデノテーション的な意味とともに示されることをコノテーション

[37] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P203　岩波セミナーブックス 2009 年 3 月 13 日同上

というのである。(時事用語事典)

記号的構成での言語表象故に、揺れ動くコミュニュケーション過程の当事者の心理過程と共に、揺れ動くことを可能ならしめるとも思われる。

## 7．ソシュールの「形相性」と言語の通時・共時変換

### ①．シーニョの「形相性」：

言語の体系において、その意味の単位としての「シーニョ」の非実体性、非現前性の故に、「シーニョ」の示す意味は、シニフィエ（シーニョの音声）の揺らぎが生じるならば、シニフィアン（シーニョの意味）の揺るぎを生じることもあり、その揺らぎは人間の観念作用の自由度、恣意性のままに、音声の「押しひろげられ、打ちひしがれつつ」につれて、意味をも揺るがしつつ、言語の体系を揺らがすといった流れが想定されている。

言語的意味「シーニョ」、その構成は、人間の意識、指向対象が、ある差異の感興をもって括りつつ進める解釈であろうが、それは音響イメージ、心的イメージであって、非現前、非実体であるという事の論理的帰結であろう。発声された「シーニョ」は、その非実体性故に「シニフィーエ（音声)」の「おしひろげられ、うちひしがれつつ」の変化につれて、言語的意味をも揺らがしうるといった、音響イメージとしての「シーニョ」の揺らぎが想定される。その揺らぎを引き起こしつつ言語表象をすすめる言語表象現場（コミュニュケーション過程）の力動性、その「シーニョ」の「音」の「おしひろげられうちひしがれつつ」の変容を抱える性質を、ソシュールは「形相性」としている。そしてその「形相性」は、言語の意味の変容、創出をも引き起こす契機として想定されている。

### ②．言語の体系とその通時態・共時態：

ラング（言語）とは「シーニョ」の格納庫として、あるいは宝庫として表現されており、人間の精神機能は、類推作用（連合軸）を働かせつつ、ラング内から一つの「シーニョ」を次々に選び取りつつ、言語音発声上の拘束、線状性（連辞の軸）の秩序の下で言語表象を進めている。この場において、ラングは、個々の言語使用の規律として個々を拘束しつつも、同時に「シーニョ」の形相性が引きこされるならば、それにつれて「シーニョ」の意味の構成、「差異の二項対立関係」の揺らぎ、言語体系の「揺らぎ」を生じせしめるという、「シーニョ」間の関係によって繋がれた網の目」としての「ラングの体系性の揺らぎ」をも抱えると言った、言語表象の場の力動が示される。

「シーニョ」の言語音声は揺らぎを抱えつつ、その揺らぎは新しい意味の揺らぎへと波及して、新たな「シーニョ」の「差異の二項対立関係」の創出を孕みつつ、それがラングの体系の量的質的な変換を引きおこしうるという経過の中で、それら「関係の網の目」としての「ラングの体系」全体への波及が引き起こされると言った、言語体系の共時変換、変容が説

明され、言語の母国語集団的な構築過程の中の、通時態、共時態が説明されている。

母国語集団内での言語使用が繰り返され、そして地質学的な時は流れ、その中で「シーニョ」が集団使用されながら、やがて言語の体系へと組み込まれる経過には、一つの「シーニョ」とその関係する「差異の二項対立関係」が、人間の脳内の神経伝達系において、刺激を受けて反応する神経伝達の生化学的な反応系として安定的に循環するところに落し得たという事であろう。その経過をもって言語の体系（ラングの体系）が、言語集団的に社会的に構築され、構造を成し、それは脳の実質の容量、増量をきたしつつ生成されるという、人類の身体性の状態、実体の変容として、種の形成を進めたとして想定され得るであろう。

その動態は、言語の表象の場面における集団構成員の大部を含む集団的なコミュニュケーション過程、ランガージュの重ね合いの集合現象の中で、構成員全体が関与する動きが条件であり、その集団的な広がりにおいて、それらの揺らぎも最大化して動き合うとして想定されよう。ランガージュの双方向的集団的駆動関係が前提になるものと思われる。

したがって脳内の言語野等の関連作動する神経伝達系の反応機序として獲得される経過とともに、習慣化される集団的な言語使用の形式性をもって刻まれたラング（言語）使用の経過が、人類の身体性という実質の変容（大脳の容量増加）を齎しつつ進行する経過として、言語の体系の構築過程、人類の進化の道程、その時間経過、地質学的な流れが、想定され得るのであろう。その経過についてソシュールは、言語体系の通時変換、共時変換として定義されていると理解される。

雑感：

ソシュールの言語論における、ラング（言語）の社会制度的な面、それは　母国語集団構成員への言語使用の規律としての側面である。しかしながらそれに加えてパロールの実践がラング（言語）体系の中に新たな「シーニョ」、言語の意味を創出する過程、「音と意味」の揺らぎとその経過が示されており、「物質界のあり方とは独立的に、言語のシステム（ひいては文化のシステム）を複雑化し、洗練していく途が開かれている[38]。」と説明される人間の観念作用、そうした文化のシステムとしてのラング（言語）の体系、その変換過程、通時変換、共時変換の様態が示されている。

ソシュールの言語論は、レヴィ＝ストロースのいう「自然生物から社会文化への移行」の淵源、駆動力である「言語使用」「言語的コミュニュケーション」について、言語音声（パロール）の生産の機序を説明しながら、その課程の場の力動性に評価を、そしてベースを置きつつの説明をしていると思われる。

---

[38] 橋爪大三郎『初めての構造主義』P48　講談社現代新書 0898　2006 年 9 月 21 日

晩年のソシュールは、バロールの機能の中に「シーニョ」の選択および結合の双方をいれている。その事から伺われるのは、言語使用の場の力動性、バロールの表象（実践）の現場、その場での言語の恣意性、時空を超えて象徴機能が働き、他方で実質・物的実在・substance(ソシュールを読む P151 の図より)など様々な表現でおおわれる「生活世界」、言語外現実・その解釈の在り様を、さまざまに再布置し続ける母国語集団的営為の現場実践課程において、その地質学的時間におよぶラングの構築過程、その集合としての、各母国語言語の体系性であろうと思われる。

その始まりとしての、差異への気付き、その気づきを重ね合い、揺らぎ合い進む言語使用にについて、ソシュールにおいては言語表象する個の心的動態に限定しての議論が展開されていると思われる。

それは近代的自我の動きを前提にして進む言語論の傾向でありつつ、しかしながら言語名称目録論、聖書の「神があらゆる野の獣と鳥をアダムのところに連れて来て、アダムがそれらにどんな名前をつけるかを見た」という言語名称目録論的な世界像に対して、ラングの体系内で恣意にその価値（言語の意味の範囲）を配分される、言語的世界のありようをもって、「実体概念から関係概念へ」とする構図を「示して余りある」ソシュールの言語論である。さらにはその言語の通時、共時の変換過程の指摘は、言語の社会的構築をも示し出しているといえよう。(221225)